正午前の三十分間

上谷　三　秋　生

郵便が遲い、いつもよりは時間が經過して居るに、例の通路を偵察す可く坂路をたどつて先祖の墓地の丘に行む、白狀するが僕等の村は總て百軒內外の細長き一小村だ、何れを見ても山又山其姿勢をいつぱ恰も馬の脊を擬つて長く走れるもあり、摺鉢を倒にした丁度富士山を模した樣の山もある、共に皆紅葉を以て思ひ〳〵の晩秋の景を飾つて居る。

折しも一陳の風さつと袂を拂ふ膚に寒し。

遙かの往還には人影も稀、無論郵便の來想な影もなし、稍あつて眼は非常に疲勞を覺ゆ、空氣は透明にして風愈涼し遙かの山の端に霞靡いて居る、未だ郵便の影も見えぬ、外でもない僕は、『みづゑ』の到着を待つのみだ、他に何の慰安を求むる事を知らぬ身は、實際僕は『みつゑ』十一號時代からの熱心な間接讀者のつもりである。

思へば去んぬる六月まで大阪に住居し或る一商店の小僧を勤めて居たが、ふと腦を病み、清野博士のすゝめにより鄉里に轉地靜養の身となつた。以來は大阪文德堂書舗より『みづゑ』の回送を約して置いた、丁度、今日あたり其到着するの豫定故、實は斯く待つ次第さ。

一陳の强風寂を破つて、嶺の松並木を鳴らした、谿川の水はサラ〳〵と音を立てゝ流れ、水車はギーカタンを無心に自然の音樂を奏して居る、向ひの家では、今年十六になるターチヤンが寒む想な風をして洗濯をして居る、前の物干竿には着物が四枚ばかり翩々と飜つて、折しも鷄が一聲高くコケツコー。

一徑の往還を隔つて上の、エメラルドグリーンの大根畑に周圍され、中にしよんぼり草葺のさゝやかなる農家一軒、淺黃の手拭を被りし老婆の姿、其セピヤ色の壁、黑く肅然と前に峙立せる柿の巨木とのコントラスト、實に、一幅の活畫題、遙か彼方の田のほとりには、尋常小學校新築校舍作業中、其エルロ！オーカーの棟日光に輝く、槌の音、山にこだましてカン〳〵。下の坂道を鳥打帽を冠て咳拂しつゝ通る男、谿流の堤を、遙かの彼方の山の端を左へ廻りて隱れつ。

未だ郵便は來らず、呆然と立ちし足は疲れて吾に歸る、トタンに、晩秋の冷風耳朶をかすめた、頭の中では只譯もなく『みづゑ』の內容を想像しつゝ家路へと急いだ。（完）

寫生行（冬の十二社）

一月四日、朝寢をして十一時頃食事を終へた、氣がくさ〳〵して頭がぼんやりしてる、東條君と松浦君が遊びに來た、何處かへスケツチに行かぬかと云はれて早速同意した、外へ出た、天氣はよい、市中は未だお正月めいて居る。

市ヶ谷から甲武電車によつて新宿で下車した、町外れへ出樣と當てもなく行く、町とは云へ密接してゐるから物皆都めいてゐる、若い男女が往來で羽根を突いてさわいでる、後から聲かけ勇ましく初荷がやつて來る、綿屋の初荷だ、二三臺通り過ぎて